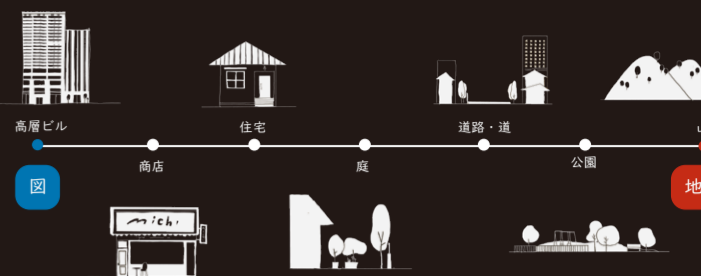
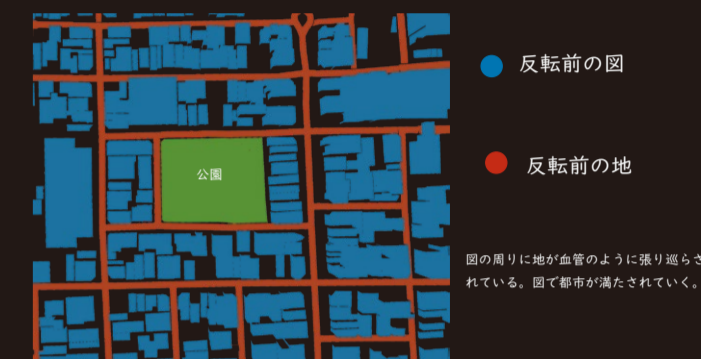


1 わたしたちが生きる街



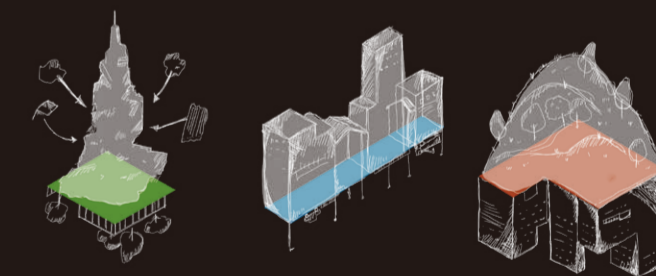
街を二つの言葉で区分するならば、「図」と「地」である。人類が効率化を求めたことで、インフラが発展し、図はどんどん高く成長し、地は浸食され都市の余白が失われる。

2 街が反転する



そこで私たちはある都市を反転させるいづら実験操作を行った。図が地の部分へと移動し、地は図の部分へと移動した新たな「都市」として現れる。

3 街が反転し積層する



都市の中で最も「地」である公園に建物が積層し、塔となる。道である場所には建物が圧縮し連なる。そして、高層ビルがあった場に山が埋め込まれる。都市の反転は、どこからか自然を呼び寄せる装置になる。

4 反転後の世界

反転し、地が増殖した世界で人はどのように居場所を見出すのか。

人と離れていた地が人と密接になり自然と人の居場所が混ざり溶け合う。インフラの流れを遮るよう立ち上がる図によって人はすれ違いから、遭遇へと変化していく。

そこに、無駄が豊かさへと転じる、新たな街の風景が開かれる。

迷い込んだわたしはやっと外に出た



空高くのびる塔に私は吸い込まれるように再び歩きだした。



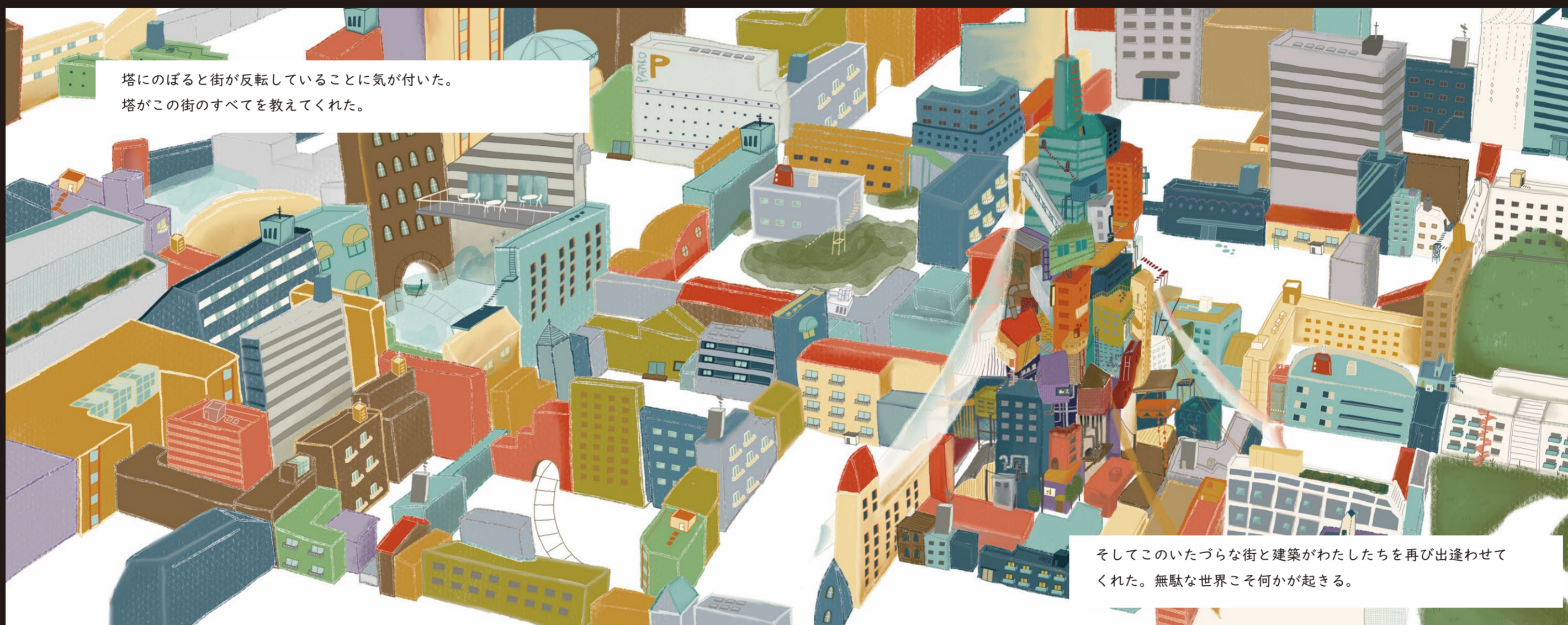
奥の扉を開けるとまた違うお店があった。気づけば、無数の入口が連なる世界にわたしは足を踏み入れていた。



入ると奥にながーいレストランがあって奥にも部屋が続いていた。



道を歩いたら、突如、始めてみるお店を見つけた。



塔のぼると街が反転していることに気が付いた。塔がこの街のすべてを教えてくれた。

そしてこのいたづらな街と建築がわたしを再び出逢わせてくれた。無駄な世界こそ何か起きる。

塔につくと、見覚えのあるあの子に偶然出会った。



塔につくと、見覚えのあるあの子に偶然出会った。



行きついた先の扉を開けるとまた違う広場があってそこは街に囲まれたおおきな水たまりのような場所だった。そこでは船に乗ったり、バケツで水を汲んで生活していた。

窓の奥には真っ暗な洞窟が続いていた。中へ進むうちに、その洞窟はおおきな山の中だったことに気が付いた。



家に帰ると細長く縦に伸びていて、奥には扉があった。

昼なのに窓はなんだか真っ暗だ。

船のったわたしは光輝くおおきな塔を見つけた。

不思議な街で誰かに出逢えるような気がした。

